

エニンジェ アリーヌ

Henninger Aline

8歳から9歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応——小学校におけるフィールドワーク

*How do Children Aged 8 and 9 Learn Gender and React to Gender Stereotypes?
Fieldwork in Japanese Elementary Schools*

はじめに

本稿は、小学校における半年にわたるフィールド研究の一部をまとめ、8歳から9歳の子どもがどのようにジェンダーを獲得するのか考察するものである。

学校で、子どもたちはどのような場面でジェンダーと接点を持つのだろうか。学校環境という集団生活をする場において、子どもたちは同性や異性の関係者と一緒に活動する。多くの場合は、男女混合で学校生活を経験する。また、保護者によって「男の子は泣かない、女の子は可愛い」などの言葉がけや働きかけを通して、子どもたちは様々なジェンダー・ステレオタイプを教示され、性別カテゴリーやジェンダー・ステレオタイプを獲得していく。

1. 子どものジェンダーに関する先行研究

本題に入る前に、子どもの「ジェンダー化」について考えておきたい。

2002年出版の『ジェンダー化される身体』の中で、著者の荻野美穂は「ジェンダー化」という言葉を使っている¹。荻野によると、「ジェンダー化」は、ジェンダーとして社会化され、表象され、生きられる程度である²。人として、身体的だけではなく考え方や性格も含む全体としてジェンダーが規定されている。したがって、「ジェンダー化」は大人に限らない。耳塚寛明によると、「子どもたちは、

¹ 荻野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房、2002。

² 氏原陽子「ジェンダー・フリーの知識とジェンダー化の経験の葛藤」『子ども社会学研究』、9号、2003。

早稲田大学ジェンダー研究所紀要『ジェンダー研究 21』

2015年 vol.5©Waseda University Gender Studies Institute

私たち大人と同様に、ジェンダーを身につけ、性別秩序を再生産しながら生きている。否、むしろ子どもたちの生き様を観察することによって、性別秩序に支配された私たち自身の姿と、性別秩序を再生産する隠れた諸制度の現場が見えてくる。」³

日本では、1980年代に、子どもの性役割（ジェンダー）の社会化に関する研究が現われ、1980年代後半以降、学校や教室で「隠れたカリキュラム」としてのセクシズムが指摘されてきた⁴。さらに学校におけるセクシズムと性差別についての本と研究論文が出版されてきた⁵。これらの研究の中で、子どもがセクシズムを含んだ教育を受けることは「性役割規範の内面化」と呼ばれ、主に女子の教育が分析対象として取り上げられている。

しかし、1990年代後半以降、ジェンダー学が社会学において学問的に認知されるようになると、女子と男子が同時に分析対象として取り上げられていくことになった。女子に関する性役割を分析するだけではない。「性役割規範の内面化」より、「ジェンダー化」という言葉が用いられるようになった。子どもたちの内面化の過程がそれまでとは違う方法で分析されるという大きな転換が見られたのである。当時、社会学、教育学、心理学の分野における「子どもとジェンダー」とい

³ 耳塚寛明「ジェンダーを再生産する底流」『季刊子ども学』、1996・12。

⁴ 日本教育学会『教育学研究会』は「男女平等」（1982）を特集し、日本教育社会学会教育社会学会研究会で『女性と教育』（1985）、女性学研究会では『女性学研究第一号』（1990）が「教育と女性学の研究の動向と問題」を取り上げた。望月重信「ジェンダーと教育」研究の推移と動向にみる「子どもとジェンダー」ジェンダー形成にアジェンダ『子ども社会研究会』1997・6・3号57頁。

⁵ たとえば、石戸教嗣「男女差から見た『かくれたカリキュラム』」「学習風土」と「かくれたカリキュラム」に関する教育社会学的研究会「知識の配分」の観点からNO.1」、1982、森繁男「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』1985第31号、218—228頁、天野正子編著『女子高等教育の座標』垣内出版、1986、天野正子『『性（ジェンダー）と教育』研究の現代的問題かくれた『領域』の特続き』『社会学評論』第39巻第3号、亀田温子・館かおる編著「学校におけるセクシズムと女性学教育」『講座女性学4 女のみでみる』勁草書房、1987。

うテーマは進化しつつあった。とくに、幼児とジェンダーに関する心理学研究は多く、幼児期に関連する調査が多く行われてきた。同様に、「子ども学」という分野が発達して、子どもへの関心が高まった⁶。これら複数の学問分野において共通している点は、子どもがエージェンシーとして再評価されたことである。子どもをエージェンシーとして捉えることにより、子どもはジェンダーの基準を個人的に内面化しているとみなされるようになった。すべての子どもがジェンダーの基準に対して同じ態度をとるわけではない。それは子どものジェンダー化の経験なのである。

ここで、子どものジェンダー化に関して重要な二つの論点を指摘しておきたい。第一の論点は、子どもは周りの人を見ることで、社会規範を知っているが、この基準について自ら考え、判断する能力ももっているということである。ジェンダーに関しても、子どもは「男らしさ」と「女らしさ」のモデルを受動的に内面化するのではなく、能動的にこのモデルを受け取り、自分なりに合わせるようにしている。つまり、子どもはアクティブな態度をとり、意識しながら社会のジェンダーの基準を内面化する。

第二の論点は、ジェンダー、つまり男らしさ・女らしさは多様であり変化しているということである⁷。子どももまた、男性・女性の役割のいくつかを取捨選択しながら、自分に合わない役割がある場合にはそれを拒否する。ジェンダー化を経験する上で、葛藤したり、内面化したりしているのである。幼児期でも、親や保育士だけではなく、子ども自身がジェンダー化のエージェントであり⁸、子ども同士でジェンダーという考え方を構築し、強化する営みに関わっているということを確認しておきたい。

⁶ 中村勝美『「子ども学」研究の現在—1990年から2009年までを中心に』『西九州大学子ども学部紀要』(1) 2010、150-152頁。

⁷ 氏原陽子「ジェンダー・フリーの知識とジェンダー化の経験の葛藤」『子ども社会学研究』9号、2003、61頁。

⁸ 藤田由美子「幼児期におけるジェンダー形成と子ども文化」『ジェンダーと教育』日本図書センター、2009、91頁。

1. 本稿の課題及び研究方法

筆者は、フィールドワークの視点から研究を行うことにした。近年盛んな子ども学の立場からも、子どもを対象としたジェンダー研究には社会学、文化人類学、教育学、心理学が適用されている。「ジェンダーと教育」研究は、すでに優れたレビュー論文がいくつもある。しかし、1990 年代から今日までのこの二十数年間をみると、具体的なフィールドワークとその調査分析が少ないといえる⁹。加えて、子どもを主体とするジェンダーのエスノグラフィックな研究は数少ない。木村涼子によると、新たな研究課題について「具体的なフィールドで質的調査、ミクロな場面への『ポスト構造主義的』分析、相応の規模で実施された統計調査、それらの数々を結び合わせていく議論を活発化されることがもめられる」。

2000 年代に入ると、子どものジェンダー化に関する実践研究で注目すべきものがでてきた。たとえば、「〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのかスポーツ実践とジェンダーの再生産」(2004)¹⁰、「幼児期における「ジェンダー形成」再考—相互作用場面にみる権力関係の分析より」(2004)¹¹、「男子のジェンダー実践の共同性と文脈性—学童クラブの男子の遊び活動に関する相互行為の分析—」¹²(2005)が挙げられよう。2014 年に出版された片田孫朝日による『男子の権力(変容する親密圏・公共圏)』はこのようなエスノグラフィックな研究をまとめ、学童クラブのフィールドワークの調査を論じている。

しかしながら、最近の「子どものジェンダー」に関する先行研究をみると、幼稚園および高校に関する実践研究の割合が多いように思われる。木村涼子『ジェンダーと教育』(2009)と天野正子編『日本のフェミニズム ジェンダーと教育』

⁹ 木村涼子『ジェンダーと教育』日本図書センター、2009、7、12、13、14 頁。

¹⁰ 羽田野慶子「〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか—スポーツ実践とジェンダーの再生産」『教育社会学研究』75 集、2004、105—125 頁。

¹¹ 藤田由美子「幼児期における「ジェンダー形成」再考—相互作用場面にみる権力関係の分析より」『教育社会学研究』74 集、2004、329—347 頁。

¹² 片田孫朝日「男子のジェンダー実践の共同性と文脈性—学童クラブの男子の遊び活動に関する相互行為の分析—」『京都社会学年報』13 号、2005、61—84 頁。

8 歳から 9 歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応

(2009)を読むかぎり、日本の小学校に関する体系立った研究は少ない。しかも、2006 年の教育基本法の改正と 2008 年の学習指導要領の改正が行なわれたことから、学校と教育というテーマについて、現代の状況を踏まえて検討する必要があるのではないか。

こうした問題意識を出発点として、筆者は日本の小学校教育におけるジェンダー構築を明らかにしていきたい。先進国では、学校は家族の次に重要な環境である。小学校は家庭の次にジェンダー形成に重要な役割を持つ場所であり、ジェンダー・アイデンティティの形成も、小学校でなされる可能性が高いのではないかと考える。日本の子どもたちは 6 歳から 12 歳までの間、大半の子どもが公立校に通う。そのほとんどが男女共学であるということや、全国の小学校のシステムがほぼ同質であると考えられることから、公立小学校がこの研究のフィールドワークに最も適していると言える。

筆者は 2013 年 10 月から 2014 年 6 月まで、4 つの公立小学校で 5 ヶ月間のフィールドワークを行なった。フィールドワークを実施するにあたり、2012 年から 2013 年にかけて調査を行うためにいくつかの小学校や教育委員会と交渉した。私立小学校、特別支援小学校、外国人小学校などは対象から外した。その結果、5 つの小学校の調査協力が得られた。これらの小学校に同一基準は特になく、フィールドとしての小学校の決定は偶然によるものである。

フィールドワークの内容			
滞在期間	所在地	学年	小学校の仮名
1 ヶ月	横浜市	1 年生	A 小学校
1 ヶ月	埼玉県	5 年生	B 小学校
1 ヶ月	東京都	2 年生	C 小学校
1 ヶ月	東京都	4 年生	
2 週間	山形県	6 年生	D 小学校
2 週間	山形県	3 年生	

筆者は、火曜日を除いて毎日8時から16時まで、調査協力を承諾した教員のクラスに入り、授業に参加した。休憩時間には子どもと一緒に遊ぶこともあった。また、小学校の教師が組織する性教育研究会と婦人問題研究会にも参加した。経済的にも地理的にも、そして規模の上でもこれらの小学校は非常に異なる。自治体や教育委員会による男女共同参画社会の推進の仕方もさまざまだ¹³。さらに、校長の方針の影響もあり、男女平等に関して異なる意識を持つ教員がいるため、小学校自体がそれぞれ特徴をもっている。たとえば、混合名簿を使用するかしないかは校長と教育委員会の方針による¹⁴。異なる環境だからこそ、ジェンダー形成はそれぞれの学校で多様であることが予想される¹⁵。

ところで、子どもたちのアンケートを作るために、男女平等教育に関する教材を使用した¹⁶。インタビューまたはアンケートの仕方は子どもの年齢によって大きく異なる。発達心理学によると、10歳以前と10歳以後の違いは大きい¹⁷。6歳から10歳までは、質問者のことを気にせず話すことへの集中力は5分から20分ぐらいである。10歳以降だと、外部の人に正直に話すことはあまりないが、集中しながらまとまりのある長い会話ができる。そのため、4年生と5年生は、一緒にグループ・ディスカッションをし、1年生と2年生の子どもたちは、担任の教員と一緒に短いアンケートを実施した。たとえば、2年生と3年生には、『どうして

¹³ 橋本ヒロ子「地方自治体における男女平等対策の現場と問題」『ジェンダー法学会』3号、2006、5-17頁。

¹⁴ 木村育恵『学校社会の中のジェンダー。教師たちのエスノメソドロジー』東京学芸大学出版会、2014。

¹⁵ 木村涼子「ジェンダーと階層の再生産装置」『ジェンダーと教育』2009、111-136頁。

¹⁶ 横浜市教育委員会『どうしてわかるの？男女平等教育補助教材3・4年生用』、橋本紀子、和田章子、村瀬幸浩、中嶋みさき編『ジェンダーという視点からの授業づくり。両性の平等と学校教材』を用いて、インタビュー表とアンケート用紙を作成した。

¹⁷ 渡辺弥生『子どもの「10歳の壁」とは何か?：乗り越えるための発達心理学』光文社、2011。

わかるの？男女平等教育補助教材3・4年生用』の中にあるストーリーを読んでから、先生と一緒に子どもたちに質問して、話し合いをした。このようにすると、子どもたちと男女平等という抽象的なテーマについても話し合うことが可能であった。

どのように子どもの「言葉」を聞くのかということについては難しいところである¹⁸。子どもの「言葉」には、子どもが実際に口に出して話すことに限らず、描いた絵や遊びの中の態度や、ジェスチャーなども含まれる。そして、自分のジェンダー・アイデンティティについて、どうやって子どもに話をさせるのかという問いも、筆者の研究方法においては重要な論点となる。これは、子ども学の研究においても提起されている問いであり、また筆者自身が入った小学校の校長にも質問された¹⁹。

子どもたちの「言葉」はよく「嘘」だと言われている。特に幼いころだと客観性がなく、よく嘘のことばを使うと言われている²⁰。しかし、本稿ですで見えたように、子どもに関する社会学的研究では、子どもについて次のような指摘がされている。すなわち、子ども自身を社会化の当事者だと捉えるならば、子どもは受動的に社会のルールを受けるだけの存在ではない、ということである。よって子どもは自分のことを理解し、他者に意味を伝えることもできると言えよう。そこで本研究では、子どもに直接問いかけるための実践的な取組みを行うことが不可欠だと考えた。それは子ども文化と大人文化の不均衡な関係を解決するためでもある。ジェンダー化という過程に関わることで、子どもが他の子どもとの関係の中で、性役割とジェンダー・アイデンティティを取捨選択しているという現象を明らかにすることができる。

¹⁸ CORSARO, W.A., *Sociology of Childhood*, Pine Forge, 1997, 50-59 頁。

¹⁹ C 小学校の校長との面接にて、2013年2月8日。

²⁰ DANIC I., DELALANDE J., RAYOU P., *Enquêter auprès d'enfants et de jeunes, objets, méthodes et terrains en sciences sociales*. Rennes : Presses universitaires de Rennes, 2006, p. 96.

その一方で、子どもの分析能力を問題とせず、子どものコミュニケーションのレベルに合わせる必要がある。たとえば、インタビューをする時に、質問の仕方や内容を工夫することで、子どもの客観的な思考能力や判断力を徐々に引き出しながら、その力を調べるのが可能だ²¹。男女別の5人グループ、または男女混合のグループでインタビューを行った際には、まず連想ゲームから始めて、日常に関するキーワードを提示した。「学校」、「家族」、「女の子」、「男の子」、「友達」などというキーワードだ。連想ゲームのようにして質問をだし、子どもたち一人一人の意見を聞くと、どんどん盛り上がり、予想しなかったテーマがでてくる。連想ゲームの後、まず日常に関して「はい・いいえ」で答える短い質問をした。たとえば「よく女の子同士で遊んでいるの?」「家で家事の手伝いをやるの?」など、子どもたちが直接答えることができるものである。子どもたちは、他の子どもの答えを聞いて驚くこともあれば、子どもたち同士で口論になることもあった。その時の会話はたしかに興味深かった。というのもジェンダー化の矛盾が表れるためである。子どもたちがインタビューに慣れてからは、よりオープンな質問をした。「なぜ男の子は女の子と一緒に遊ばないと思う?」「なぜ男性の先生がもっと怖いと言ったの?」といったものだ。子どもは自分が考えていることを自由に発言した。

1. クラスでの実践研究

1) 2014年度C小学校の2年生後期、学活「どうしてくべつするの?」

ここでは、ジェンダーに関する一つの調査を詳細に紹介したい。2014年1月に東京都のC小学校で調査を実施した。調査者は筆者とクラス担任の小林先生（仮名）である。小林先生は数年前からジェンダーに関心を持ち、教育の中のジェンダーと性教育について研究している。先生に依頼し、朝の学活で（授業が始まる前に）調査を行うことにした。『どうしてわかるの?男女平等育補助教材3・4年生用』の「どうしてくべつするの?」からテキストと絵を選び、コピーして、A5

²¹ Ibid., pp. 137-138.

8歳から9歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応

サイズにプリントアウトした。このシークエンスのページを黒板に貼り、子どもたちに少しずつ説明をして、一緒にあるストーリーについて考えてみようともちかけた。子どもは自分の席に着席したまま聞いていた。絵を見せながら、次の二つの文章を読んだ。

「りえ、食べ終わったお皿ぐらいはかたづけなさい。まったく、女の子でしょう。」また言ってる。弟だってかたづけけないのに。女の子、女の子って。「うん。」と返事すると、ママが「女の子なんだから返事は『はい』でしょう。」「はい、わかりました。」と答えて、お皿を持って行きながら、なんでいつも女の子だからっていわれるんだろうと思いました。

ぼくが3才ぐらいのときだったと思う。道でころんで大声で泣いた時、お母さんに「そんなことで泣かないの。男でしょ。」と言われたことがある。友たちとけんかをして、ベソをかきながら家に帰ったときも「男の子なんだから、もっと強くなりなさい。」と言われた。勉強だって、「男の子はもっとべんきょうしなくちゃ。」なんてよく言われる。妹はあんまり言われないのに。なぜ男の子は、がんばらなきゃいけないんだろうと思う。

その後、次のように質問した。

「お母さんやお父さんだけでなく、おじいちゃんやおばあちゃん、きょうだいや友だち、先生などいろいろな人たちから、『女の子だから』とか『男の子だから』とかいわれたことがありますか」。

それからコピーしたページを配り、小林先生ともう一度説明して同じ質問を投げかけた。

最初、子どもは「言われてないよ」と答えたが、小林先生と例を挙げながら、「たとえば、男の子の色と、女の子の色がありますか。」と尋ねると、数人が大きい声で答えた。それらの答えの大半によると、好きな色があるが、それは個人的な好みだ、という内容だった。そこから子どもたちは積極的に話し、興奮しながら多くの意見を返してきた。

小林先生：赤い服を着て、赤いランドセルを持つ男の子は、オーケー？

8歳から9歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応

クラス全員は：は——い

小林先生：スカートをはいている男の子は？

クラス全員：ダメ！

児童 a（男）：おかまはいる！

小林先生：「おかま」は悪い言葉使い

筆者と小林先生：言葉使いと服について考えましょう。女の子っぽい、男っぽい服がありますか。言われたことがありますか。

たくさんの子どもが手を挙げて答え始める。

児童 b(女)：もっと女の子みたいな服を着てとお母さんに言われている！

児童 c（女）：「～しろ（命令形）」は言えない。

児童 d（男）：ぼくは「僕」を使うけど。ぼくのお母さんは一回「うち」と言った。

たくさんの子どもが同じような話をした。それから小林先生は「アンケートに答えてください」と言って、10分間記入する時間を設け、この授業を終わりにした。

この事例から、子どもたちは自分の思っていることを述べ、他の子どもと話し合って発言し、ジェンダーに敏感であることがわかった。限られた時間内での調査（子どもの発言と後に集めたアンケート）の結果はさまざまな問題を含んでおり、掘り下げるべき点もある。しかし子どもたちが、ジェンダーのステレオタイプに対してどのように関与しているかということはより明らかとなった。

2) 2014年度 D 小学校の3年生後期、学活「どうしてくべつするの？」

D 小学校に入った時、6年生のクラスにグループインタビューをして、子どもたちの意見を聞くことができた。3年生のクラスの場合はグループインタビューが難しいと思われたため、C 小学校と同じように調査を実施することにした。クラス担任の坂本先生（仮名）に調査の資料を提示して依頼したところ、理解を示してくださったため、その週の道徳の授業で調査を行うことになった。坂本先生はこの調査に関連づけて指導要領に基づき男女平等について話すことにした。

8歳から9歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応

道徳の授業が始まる前に、私がコピーしておいたアンケート用紙を坂本先生が配って、子どもに自分の名前を書いてもらった。その後、オーバーヘッドプロジェクターを利用して、「どうしてくべつするの？」のページを黒板に表示して少しずつ説明をし、一緒にあるストーリーについて考えてもらった。子どもは自分の席に着席したまま話を聞いた。坂本先生は絵を見せながら文章を読み、その後、「みんなもこういうことを言われたことがありますか？ありましたら、書いてください。」と言った。子どもたちは困惑して、何を書いたらよいかかわからないように先生を見ていた。そこで坂本先生は、それぞれのステレオタイプの例を示して、子どもたちに尋ねることにした。

坂本先生：(男子に)「ちゃんと食べなさい」と言われたことがある？

多くの男子：は——い、言われたことある！

児童 a (男)：家族全員に言われるし。

クラス全員：(大騒ぎ)「お姉さんだからあれしない、弟だからあれしない。」はよく聞く。

坂本先生：たしかに、兄弟の役割をよく聞く。

児童 b (女)：「足をひらかないでください」とよく言われる。

みんなは同意する。大騒ぎになる。

坂本先生：手を挙げて、言われたことをみんなの前で言って。

児童 c (女)：「足をひらかないで」

児童 a (男)：男だから掃除する。

児童 d (男)：「女の子のようにしないで」

隣の児童は笑う。

女の子 3 人：「足をひらかないで」

児童 d (女)：「お姉さんだからやさしくしない」

彼女の友達はずぐに反応して、同意して、同じことを繰り返す。

児童 e (男)：「男だから宿題しなさい。ゲームはだめ。」

児童 f (女)：ずぐに反応して、お母さんからゲームのカードを集めることを禁止されていると答える。男の子がやることだから「ゲーム、カー

ドをやっていけない。」

みんなは大騒ぎになる。この禁止は不当だと意見は多い。

児童 g (女) : 「足くさい、石鹸で洗いなさい」

彼女も隣の児童たちも笑う。

坂本先生 : 「男だから泣かないで」ということを聞いたことがある？

多くの児童たち : ある！ある！

坂本先生 : 「女の子だからそんなことを聞いてはだめでしょう」は。

クラス全員 : ある！ある！

坂本先生 : 男子に「女の子に優しくしなさい」は。

多くの男子 : は——い、ある。

坂本先生 : 最近、このようなことは変化してきている。たとえばお父さんたちも料理するようになった。みんなは「料理を作れない男はだめ」ということを聞いたことある？

クラス全員 : はい。ある！

子どもたちが盛り上がり始めたので、先生はしばらく黙っていた。それから先生は、「女の子だから」とか「男の子だから」とかよく言われる、とまとめた。少し間をおいて、オーバーヘッドプロジェクターの絵を見せながら、「言われたことに対して、なぜだろうと思ったことがある？」と子どもたちに問いかけた。すると、クラスの半分ほどが「はい」、もう半分が「いいえ」と答える。坂本先生が「当たり前だと思う？」と聞くと、クラス全員は「はい」と「いいえ」と答える。

坂本先生は自分のことについて話し始め、先生の親はそんなことを言われるのが嫌だったから、先生とお兄さんたちにもあまり言わなかった、時代は変わるんだと語気を強めた。それから、坂本先生は「男女」という言葉について考えてもらいたいと言った。

坂本先生 : 男女？^{じょだん}女男？

子どもたちは当惑した。先生は黒板に貼ってある名札のケース（男子の黒いケースと女子の赤いケース）を取り、「女男？」^{じょだん}と言い返すと、いつもと違って、女子のケースを男子のケースの上にする。女子は強く反応して、叫んで手を振っ

8歳から9歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応

て騒ぐ。「なぜ男女の代わりに女男じょだんを使わない？なぜ男の子は君で呼んで、女の子はさんで呼ぶ？」と聞くと子どもたちは答えない。坂本先生はある男子に向かって「ゆうだいさんと読んだらどう？」と聞くと、彼は「嫌な感じ！女の子みたい！」と即答した。坂本先生は繰り返して、「男女と言うけれど、女男じょだんとも言える」。真面目な顔をして、ゆっくりみんなに尋ねる。「男子と女子、どちらが偉いといことはある？」直ちにほぼ全員の子どもが「ないー！」と答えた。坂本先生はこの返事から授業をまとめて、男女平等について説明した。授業終了のチャイムが鳴り、話は最後までいかなかったが、筆者は子どもたちにアンケートの協力をお願いした。

今回の授業とアンケートからわかることは、以下の二点である。

1. 性役割のステレオタイプとジェンダー化の間には関連がある。子どもたちはまず自分の家族からよくジェンダー・ステレオタイプなことを言われることがある。
2. 意識をせずに伝統的性役割を内面化する場合はあるが、ふざけてジェンダー・ステレオタイプを繰り返す、または反対してジェンダー・ステレオタイプに抵抗する場合もある。性役割によりその程度は異なる。

ジェンダー・ステレオタイプの影響は強い。子どもは教員と一緒に考えながら、性役割について活発に発言した。たとえば「男だから泣かないで」ということに関して、クラスが大騒ぎしたことを踏まえると、みながこのような経験をしたことがわかる。子どもたちは「男の子」と「女の子」の性別カテゴリーをきちんと区別しているということである。とくに、一般的なステレオタイプに基づいて、「男らしくない男」と「女らしくない女」は批判されている。スカートをはく男の子は「おかま」と言われ、足がくさい女の子は笑われる。自己の性役割観にも関わらず伝統的性役割を守っている子どももいるだろう。クラス全体がジェンダー・ステレオタイプを守る雰囲気になると、ステレオタイプから離れることは難しくなるだろう。しかし、子どもは個人的にも「男らしさ」と「女らしさ」のイメージと態度を作る。たとえば、児童f(女)がゲームについて話した時、大勢の子どもが反応した。女の子ということと関係ないという声もでた。カードを集め

8歳から9歳の子どもにおけるジェンダーの習得とジェンダー・ステレオタイプに対する反応

るために、fさん自身は自分のお母さんと交渉する。こうして子どもは、日常生活で自分のジェンダーを学んだり、作ったりしている。

おわりに

これまで述べたような小学校での実践研究から、子どものジェンダー形成を詳しく分析することができるのではないかと考える。確かに、様々な視点をもって注視する必要があるため、フィールドワークは複雑だ。しかし、今後も引き続き、子ども同士の関係、教師と子どもの関係、子どもたちの授業態度、遊び方、言葉遣いなどがどのようにジェンダー形成に関わっているかを把握するために調査を進めたい。さらに、授業中にジェンダーはどのように描写されているか、教科書に「男らしさ」と「女らしさ」はどのように表象されているかということにも着目したい。

本稿は INALCO 大学に提出予定の博士論文の一部である。男女平等の実現という視点から、授業や教科書の内容、子どもたちの授業態度、とくに家庭科とスポーツの授業、また休み時間の過ごし方や遊び方、子ども同士の関係、子どもの態度や言葉遣いなども見ていく必要があると考えている。今後これらに着目して、小学校におけるジェンダー形成を分析していくつもりだ。

【参考文献】

飯島吉晴『子供の民俗学：子供はどこから来たのか』新曜社、1991。

国民教育センター『ジェンダーと教育の現在』国民教育センター、2004。

福富護『ジェンダーと心理学』朝倉書店、2006。

藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『ジェンダーと教育』世職書房、1999。